岩瀬文庫コレクション

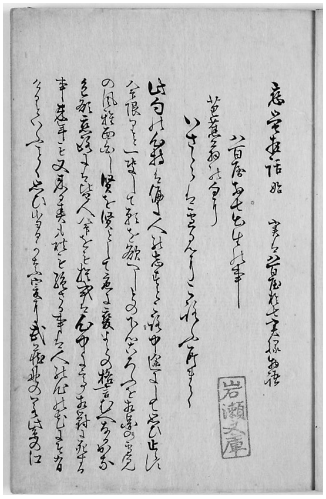
恋蛍夜話（149―64）1冊

寛文8（1668）年、江戸本郷で八百屋を営む太郎兵衛夫妻が念願の子どもを授かりました。子宝祈願をした七面大明神にちなんで「お七」と名づけられたその子は、誰もが魅了される美少女に育ちます。

お七14歳の天和元（1681）年春、火事で類焼した八百屋一家は、小石川の円乗寺に仮住まいすることになりました。寺には旗本の次男・山田左兵衛が寄宿しており、この21歳の世にもまれなる美青年に、お七は一目で恋に落ちます。左兵衛もまたお七を見初め、二人は夜ごと人目を避けて忍び逢う仲となりました。

秋になると八百屋も再興され、一家は新居に移ることになりますが、お七は左兵衛と離れるのが悲しくてなりません。そこへ、寺や八百屋へ出入りをしていた吉三郎が、親切ごかしに近づきます。小悪党の吉三郎は恋文の受け渡しを請け負い、お七・左兵衛双方から小遣いをせびりました。お七の自由になる金が尽きると、吉三郎は「火事になればまた寺で暮らせる」とお七を唆します。実は、火事のどさくさで八百屋の家財を盗もうという腹でした。左兵衛恋しさで分別のなくなったお七は吉三郎の言葉を真に受け、ある風の強い夜、家に火を放ちます。火付けは天下の大罪、お七は天和2年2月、市中引き回しの上、鈴ヶ森にて火あぶりの刑に処せられました。

本書は、芝居や小説などで有名な「八百屋お七」の実録写本です。書名の「恋蛍夜話」とは恋の炎に我が身を焦がしたお七の象徴。美しくも哀れなタイトルです。



▶序文に「八百屋お七の実伝を世に知る人少なし。ただその名のみ高くして上つ方より下々まで言葉を誤り聞き違い多し。貞享の頃のやんごとなき人の文庫に秘しありし真実なるを乞い請けてその意趣を糺してここに記す」とあります。

シリーズ 63

西尾の古を探る

幡豆の小笠原氏

室町時代、小笠原氏は三河守護代一色氏の下で代官を務めていましたが、長正が討ち死にしたため、伴野系の小笠原氏は没落しました。しかし、小笠原の一族は幡豆の地に残り、小笠原長重らは西条吉良氏の家臣団に組み込まれていきます。また、深志系（松本）の長高は吉良氏を頼って幡豆に入り、吉良氏がその子、宗長（範安）を幡豆欠城に迎え、幡豆の地を小笠原氏に任せたといわれています。

永正11（1514）年には、深志系小笠原定政が早川三郎のこもる幡豆寺部城を攻略して奪還し、定政の子孫（安芸守系）が寺部城、長重の子孫安元（摂津守系）が欠城を拠点にしました。東部丘陵沿いにも勢力を延ばし、安芸守広重の弟・小笠原三九郎長茲は平原に糟塚砦を築いています。

弘治元（1555）年に吉良義昭の離反により今川氏が西条を攻めた時、荒川、幡豆、糟塚を固めており、小笠原氏は吉良氏の力が衰えたことによって今川方に属していたことが分かります。

桶狭間の戦い後は家康方に属したと思われ、永禄4（1561）年に吉良荘内において家康と吉良勢との戦いの際には、東条城攻めに小笠原三九郎長茲が参加しています。小笠原両家は、永禄7年に家康から幡豆郡の地を与えられた後は、三方原の戦いや長篠合戦、小田原攻めに参加し、徳川家に対して忠勤に励んでいます。

石田三成の謀反の時、安芸守系小笠原氏の信元と広勝は九鬼水軍の押さえとして師崎に陣取り、天正18（1590）年に関東へ移ると同時に御船手役を務めるなど水運に深く関与しています。